

## 【2種類の肺炎球菌ワクチン【23価と13価】、2020】

《シニア用の23価肺炎球菌ワクチン》 「坂東玉三郎ワクチン（ニューモボックス）」は、65歳になる年度〔4月1日～翌年3月31日〕に1回のみ定期接種となりました。平成30年までは5歳刻みで70、75、80、85、90、95と100歳も定期接種です。今年65歳の人は5年後の70歳には定期接種になりません。以前に接種している人も定期接種になりませんが、5-7年後に任意接種はできます。この5年間の経過措置はまた5年間延長され2023年度まで有効です。それ以降は65歳の1年間のみ定期接種となる予定です。

《乳幼児用の13価肺炎球菌ワクチン》 「加山雄三ワクチン（プレブナー）」も65歳以上で接種できるようになりました。免疫細胞（リンパ球）に作用して長期の免疫持続が期待できます。

2種類の肺炎球菌ワクチンの使い方、より有利な接種方法と順序と間隔について説明します。

- ◆ 23価を接種してあれば、1年以上あけて13価を接種する。2回目の23価を追加する時は、さらに1年以上あけて、且つ23価の1回目から5年以上あけて追加する。  
多くの方は、23価を済ませていますから、今後はこのうち方で接種しましょう。
- ◆ 13価を接種して、6-12か月後に23価を接種する。それ以降の追加接種は不要です。  
13価を先に接種すると免疫効果が高まり、その後の23価を追加した時により高い免疫が期待できます。23価を接種後、5-7年で2回目の23価を追加した時よりも高い免疫ができることが知られています。23価を追加接種する前に13価を接種するように計画しましょう。

### 【推奨される接種方法】

- 1) 4-9月に65歳になる人は、65歳になったらすぐに13価を接種して6か月以上あけて、3月末までに23価を定期接種する。
- 2) 10月以降で65歳になる人は、23価を定期接種して1年以降に13価を接種する。そして5年経ったら23価を任意接種で追加する。
- 3) 今年度66-69歳の人は、今年は13価を接種しておいて70歳になる年度に23価を定期接種する。71-74歳（75歳）、76-79歳（80歳）、81-84歳（85歳）、86-89歳（90歳）、91-94歳（95歳）、96-99歳（100歳）も同様です。
- 4) すでに23価を接種している方で、5年経って23価を接種する時には、今回は13価を接種して、半年から1年後に23価を任意接種で追加する。
- 5) 脾臓摘出後などの免疫低下時の肺炎球菌ワクチンは、以前から23価が保健適応されています。この時に13価を先に接種して、8週間以上開けて23価を接種すると有利です。国内の13価は、2カ月から6歳未満と65歳以上にしか認可されていないので、輸入ワクチンを利用します。副反応についての国の保証はありませんから本人または保護者の同意書が必要です。海外ではこの世代にも認可されているので安全性には心配ありません。

Ⓐ  13価 (6か月から1年後)  23価 【更なる追加接種は不要と考えられています】

Ⓑ  23価 (1年以上開けて)  13価 (1年以上かつ1回目の23価から5年あけて)  23価

Ⓒ  13価 (8週間あけて)  23価 【脾臓摘出時や免疫低下などで感染リスクが高い時】

名鉄病院予防接種センター

☎(052) 551-6126、[時間外]551-6121